くるべ古代歴史館企画展

聖武天皇の東国行幸ゆかりの地　～伊勢・河口～

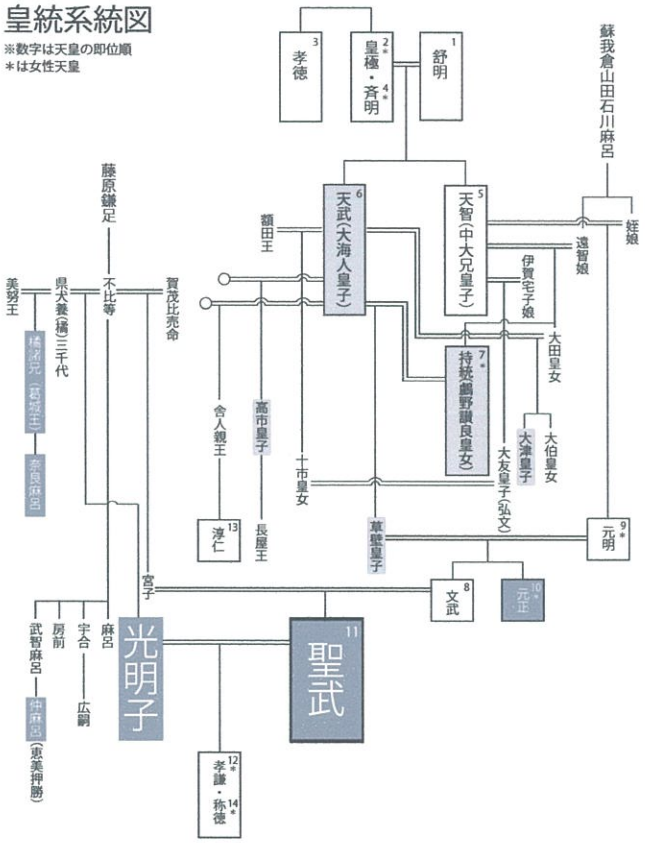
聖武天皇の東国行幸と伊勢・河口

『続日本紀』によると、天平十二（740）年10月29日に平城宮を出発した聖武天皇をはじめ皇族や橘諸兄や藤原仲麻呂といった貴族に加えて、騎馬400騎を伴う総勢1000人に及ぶとみられる一行は、伊賀郡安保頓宮を経て、11月2日に伊勢国壱志郡河口頓宮に到着しました。翌日、伊勢神宮へ幣帛を奉らせ、ここに10日滞在し、和遅野に遊猟します。その間には、藤原広嗣の乱平定の報告を聞き、壱志郡と鈴鹿赤坂頓宮を経て、朝明郡で2泊されます。また、この時に詠まれた歌が萬葉集に残されています。

川口には元来、「川口関」という関所が設けられていたことが、『続日本紀』の記載や木簡から明らかになっており、遺跡から発見された資料からはこの時の河口頓宮こそが、津市白山町川口所在の関ノ宮遺跡と考えられています。

皇統系統図

※数字は天皇の即位順
＊は女性天皇



朝明郡を訪れた人々

…壬申の乱の時（『日本書紀』により確認できる人物）

…聖武天皇東国行幸の時（『続日本紀』により確認できる人物）

河口頓宮の所在地をめぐって

江戸時代以来これまでに、いくつかの地点が関と頓宮の所在地として推定されてきました。江戸時代や明治時代の地誌類には、川口地区南部の医王寺付近（a）と白山中学校付近（b）が挙げられています。

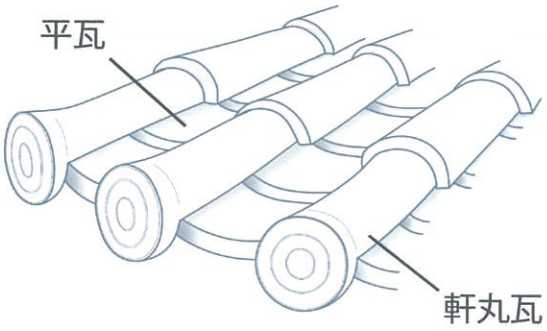
a地点については、土塁が周囲に築かれていることから「関」とみる見解がありましたが、今日では中世城館である川口城跡の土塁であることが明らかになっています。b地点については、土地が不安定ではないかとするむきがありましたが、この点でも縄文時代から遺跡が確認されていますので、安定した沖積地であることが明らかになっています。

さらに、今日では旧白山消防署付近（c）も周囲に「宮ノ前」「宮ノ後」といった地名が残っていることから、新たに候補に挙げられています。近年では、道路建設に伴う発掘調査や三重大学による学術調査によって、川口地区北部の川口北方遺跡（d）でも奈良時代の土器や製塩土器が出土していることから、東西約3㎞、南北約1㎞の平坦な範囲に奈良時代の遺跡が広がっていた可能性が高いと考えられています。

関ノ宮遺跡出土軒丸瓦※

関ノ宮遺跡出土平瓦（上面）※

関ノ宮遺跡出土平瓦（下面）※



今後、同様に、伊勢国によって整備されたと考えられる5か所の行宮（あんぐう）のうち、難波宮式類似の瓦は「河口頓宮」「壱志郡」「赤坂頓宮」の3か所の比定地で発見されていることから、「朝明郡」でも難波宮式類似の瓦が発見される可能性があるでしょう。

関ノ宮遺跡と河口頓宮

関ノ宮遺跡（b･c地点を含む）は、津市白山町川口に所在する遺跡です。昭和初期に軒丸瓦（のきまるがわら）が拾われたことから、当初は古代寺院と推定されていました。

川口で採取された瓦は、瓦当に三重の圏線（外縁のほかに二重の丸印）を表現した重圏文瓦（じゅうけんもん）です。聖武天皇によって整備された難波宮の瓦の文様として採用された文様は、四重の圏線が表現されており、その類似性が指摘されています。伊勢地方では、聖武天皇の東国行幸にゆかりのある地で、難波宮式と類似するこの瓦が点在して確認されており、聖武天皇行幸路との関連が指摘されています。

近年、関ノ宮遺跡で発見された瓦は、鈴鹿市所在の伊勢国府跡で発見されている瓦と同笵（どうはん）（同じ型で作られた）の瓦であることが判明しました。このことは、伊勢国府で用いられていた瓦と同じ窯で焼かれ、何らかの理由によって運ばれたことを示しています。つまり、当時の関の維持管理は「伊勢国」の職務であり、聖武天皇の東国行幸にあたっては、「造伊勢行宮司」が任じられていますが、実際の「河口頓宮」の造営は、伊勢国の業務の一環として遂行されたことが証明され、大いに注目されます。

関ノ宮遺跡出土土師器※　　※は津市教育委員会所蔵

●お世話になった方がた
公益財団法人石水博物館・津市教育委員会・独立行政法人国立文化財機構　奈良文化財研究所
熊崎司・蔵前克也・龍泉寺由佳・山本祥隆（順不同・敬称略）
●本展覧会の企画およびリーフレットの作成は川崎志乃が担当しました。

久留倍官衙遺跡公園　くるべ古代歴史館企画展
聖武天皇の東国行幸ゆかりの地
～伊勢・河口～

会期　平成30年11月22日（木）～12月16日（日）
主催　四日市市教育委員会
編集　四日市市教育委員会　社会教育課
発行　四日市市教育委員会　平成30年11月22日